説教20210516使徒1:15-26 ヨハネ17:11-19

「一つとなるために」 82　Ⅱ147　　158

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

今、歌われました讃美歌は原題をhome sweet homeと言いまして、19世紀のイギリスで作曲されました世俗の歌です。ですから、こうして神を賛美する歌詞を付けられても、なんか世俗の香りがぷんぷんと漂ってくる感があります。

そのことが悪いとか言っている訳ではありません。むしろ、そこに世俗と聖なる物との接点が見出されるよい曲だと思います。

この曲は日本聖公会の讃美歌集でも取り上げられていまして次のような歌詞になっています。

わずらい多き世の中にも　　　清きみ民の群れに入りて

心安けく主のうたげの　　　　み招きうくる　その楽しさ

ここでは明らかにこの世で選ばれた教会の兄弟姉妹が、主イエスを中心にして心安らかに、食事の席について喜び楽しんでいる姿が歌われていまして、まさに賛美歌なり、という歌詞になっています。それに比べ、今私たちが歌った歌詞はどうでしょうか。かなり、実際のこの世での家庭、マイホームを思わせる歌詞になっていますね。しかしこれは実は、私たちが最後の時に共に招かれ入れられる、永遠の安らぎの神の国での暮らしを、幻として歌っているのです、といえば正解でしょう。

ですが、私も例外ではありませんが、この世を歩む私たちは、他の人の幸せそうな家庭生活をうらやむといった、嫉妬心から逃れられません。そんな私たちは、今ここに実現をしている現実から、絶大な影響を受けて嫉妬心を燃やしてしまうのです。そんな時、永遠の喜びの暮らしが最後の時に実現するといった、いつ実現するかも知れないような事柄は、私たちの脳裏から吹っ飛んでしまうことでしょう。

しかし、私たちにとって、最後の日に完成する、全員と共にある永遠の喜びの暮らしに思いを致すこと、それを信じていくことは大事なことで、欠かすことが出来ません。

それと同時に、今の世での幸せな家庭生活も、私たちは決しておろそかにすることは出来ません。それは全員がいたわりあいながら実現していくものです。しかし永遠なるものではありません。その有様は、この世の草花の姿に譬えられましょう。「朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい／夕べにはしおれ、枯れて行きます。」と詩編は歌っています。私たちのこの世での家庭はまるでこの移ろいゆく花の様であります。そして移ろいやすいものであるからこそ、その一瞬一瞬を大切にして手入れをしていくことでありましょう。

　今、ニュース番組などに耳を澄ましていますとよく聞こえてくるのは、せっかくコロナ渦にあってマイホームでの家族水入らずの時間が増えたのに、その水入らずの時間が、間が持たなくて互いに暴力を振るってしまう時になってしまうという悲しむべき現実です。

先ほども申しましたように、この世の家庭は移ろいゆく花の様であります。その有様は、時代の変遷によっても代わっていくかも知れません。今の世では、一人世帯や二人世帯が増加していて、両者を足した数は、全体の世帯数の半分以上にもなります。又、2040年には一人世帯が全体の40％を占めるといった予測もされています。この変化が御心であるかどうかということは難しい問題です。すぐには分からないことでしょう。

ただ、言えることは、私たちが、安易な現実の比較によって、隣りの家は幸せそう、とか古き良き時代の家庭は幸せだったのに、今は、みんな一人暮らしになってきて、本当に孤独な時代だ、などといったような安易な判断に陥らないという事でしょう。そのような判断をしていますと、イエス様は私たちの近くにはおられなくなり、私たちは家族を絶対視する家族信仰、マイホーム信仰へと陥っていしまうおそれがあるでしょう。

今日は、読まれました聖書箇所から、神様の視点によって、私たちの家族の生活とは何なのかを覚えていきたいと思います。

ヨハネ福音書17：15「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。」これは、天に挙げられているイエス様が、隣にいる父なる神に対して、地上にいる私たちのことを覚えて、とりなしの祈りをして下さっているのです。私たち人間を、この世から取り去らないで下さい、むしろ彼らを守って下さい、と、イエス様は父なる神に懇願されています。

この取り去る、という事と、守る、という事を考えてみましょう。ユダもこの地の裂け目から転落して、この地から取り去られましたが、この世にあっても、取り去るという事が横行しています。伝染病にかかったらとにかく隔離するというのが常識になっています。又、会社などで役に立たない人はやめていただく、子供に暴力を振るった親は子供から引き離す、という事が常識として語られます。こんな風に取り去る、言い換えれば排除するという考えが、この世で大手をふっているのはなぜでしょうか。それは当事者たちの目から見れば、そうすることが最も確実で有効な対処方法だと思われるからでありましょう。しかし、主イエスの目から見れば、決してそのようには見ておられないのです。こんな風に排除するのではなく、どうかお父様、彼らを守って、とにかく共に居られるようにして下さい、というのが主イエスがされた祈りでありましょう。このような祈りを採り入れたこの世での行いは、包摂、小包みの包むに、食べ物を摂取するの摂、と書きますが、包摂と呼ばれます。包摂は排除の反対語であります。

　例えば、子供に暴力を振るう親でも、一時的に引き離すことは必要ではあっても、最終的な目標は、その親の性格を変えて、遂に子供と共に暮らせるように教え導いていく、というのが包摂の考え方であります。この包摂の考えが、この世に行き渡り、そして今、行き渡っている排除の考えにとってかわれば、この世の中も、随分良くなることでありましょう。

　包摂というのは、今日の説教題にしました、一つになるという事です。包摂の業が実現していくには、祈りが欠かせません。包摂していくということはそんなに簡単なことではないでしょう。「子育ては親の責任」などと言って割り切ってしまえば、ことは簡単ですが、それでは包摂の業は前には一歩も進みません。包摂の業を前に進めるには、当事者や支援者、そして社会全体が、時には修羅場を経験しながら、それでも諦めずに歩みを進めていくような、遅々とした、困難に満ちた道程でありましょう。

「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。」このように私たちの為に祈って下さるイエス様は、この地にある私たちが一人も排除されることなく、守られ、一つに包摂されていくことを願っておられるのです。

この箇所のちょっと前になりますが、ヨハネ福音書17：14 「わたしは彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないからです。」私達クリスチャンはこの世には属していない、とイエス様はいわれます。これはどういうことでしょうか。これは私たちがこの地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを言い表しているでしょう。このことは、先ほど申し上げました、この世での家庭の有様が、移ろいゆく花の様であるという事にも符合することでありましょう。私たちはこの世には属していません、と言われると或いはギョッとされるかもしれません。不安感に捕らわれるかもしれません。しかし、私たちはここで、「わたしたちの本国は天にある」という事を常に思い起こしていかねばなりません。18節に記されています様に、イエス様は、私たちを移ろいやすいこの世に、遣わされたのです。

　仮住まいのこの世に、なぜ私たちは遣わされたのか、その理由は分かりません、ですから私たちは、日々それをイエス様に問いかけてまいりましょう。13節でイエス様は「わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。」とおっしゃいます。「私の喜び」、イエス様の喜びというのは、私たちの小さな喜びとは比べ物にならないくらい大きくて私たちには計り知れない物でありましょう。イエスさまは、私たちがまだ天の本国に昇る前の、この地上での仮住まいにおいても、その喜びの前味を私たちに味わわせようとされておられるのです。ではどうすれば私たちはこの世でその味を味わうことが出来るのでしょうか。

それは、先ほど申し上げた、悪い者から守って下さい、というイエス様のとりなしの祈りを私たちも祈りながら、具体的には包摂の業に励んでいくことでしょう。

今日の使徒言行録の箇所は、恐ろしい描写がなされていて、読むものに恐怖を催させるところです。私たちはなぜ、ここに恐怖を覚えるのでしょうか。それはもし我が身がこんなことになったら、それこそ大変だという思いがどこかにあるからでしょう。厳しい言い方をすれば、私たちは、誰一人ユダの負った罪を、自分には関係ないですよと、全く他人ごととしては捉えられないのです。私たちは、多かれ少なかれユダと同じ罪を背負ってこの地を生きる者たちです。言い換えれば、私は何時、会社から排除されるかも知れない、家族から排除されるかも知れないといった、排除の考えに染まったこの地上の社会全体の罪と言えるかもしれません。

一方、排除の考えと対極にあります、包摂の考えが、この世に行き渡ったとしたらどうでしょうか。私たちは、全くユダのようにびくびくしながら生きることはなくなるでしょう。もしそのような場所がこの世で実現するとしたら、それは真っ先に教会においてであると私は思っています。教会という場所は、天に昇られたイエス様が10日後に約束された通り、天から聖霊を私たちに吹きかけられて、それで私たちが集まるようにされたところであります。私たちはこの教会で、天の本国で味わうまことの喜びの前味を味わうようにと一つにされて集められています。

今回ホームという語の語源を調べていてそれがハウント(haunt)だ、という事を知りました。ハウントというのはたまり場という意味です。つまりなぜだか人が集められて集団になっているという場所のことです。しかもそれは霊によってあつめられるというのです。今、一人暮らしの世帯が増える世の中にあって、このように語源に遡って、家庭という場を、たまり場として捉えるのは或いは意味があることかも知れません。しかし、十分注意しなけれなならないのは、霊には、悪い霊も、よい霊もあるという事です。幸いなことに、私たちの教会はイエス様によって、憐れみと分別の霊である聖霊に満たされておりますので、私たちは幸いです。私たちは今日も心置きなく、聖霊に満たされ、このたまり場で、共に主を賛美してまいりましょう。

祈ります

天の父なる神よ

私たちは今、新型コロナウィルスによってここに集まることに困難を覚えています。しかし、あなたは私たちを排除されるのではなく、むしろ包摂して、一つの者にしようとして下さいます。私たちが自分のうちにある排除の心を捨て、あなたの計り知れない愛の内に守られ、一つとなっていくことが出来ますように。

私たちが例え物理的に離れて居ようとも、心の一致によって、どこにいましても孤独を感じることなく、あなたから祝福されて歩んでいくことが出来ますように。

今、新型コロナウィルスに罹患し、離れて暮らしている方々が、孤独を感じることなく、あなたの慈愛の御手によって励まされ、支えられます様に。その為に私たちが熱心にとりなしの祈りをしていくことが出来ますように。

父と聖霊と共に一体であって